立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
共同プロジェクト研究
２０２０年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局･職	氏　名
	異文化コミュニケーション学部・教授	細井尚子　　印
研究課題	「東アジア文化圏」研究基盤の構築―娯楽市場における「大衆」「演劇」「大衆演劇」から―	
研究組織（研究代表者・研究分担者）2021年3月現在	所属研究機関・部局・職	氏　名
	立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授	細井尚子
	明治大学・文学部・兼任講師	中野正昭
	立教大学・外国語教育研究センター・教授	森平崇文
	早稲田大学・演劇博物館・講師（任期付）	宮信明
	大阪大学・文学研究科・准教授	輪島裕介
	早稲田大学・演劇博物館・助教	後藤隆基
研究期間	2018年度　～　2020（2021）年度	

研究経費※	2018　年度		2019　年度		2020年度		総計	
(上段：支出金額)	1,275,000	円	1,807,865	円	173,000	円	3,255,865	円
(下段：採択金額)	1,275,000		1,810,000		2,385,000		5,470,000	

※1円単位で記入

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本プロジェクト研究は、「東アジア文化圏」研究基盤の構築を目的とする。中華文化の影響を自己の基層に内包する「東アジア文化圏」は地理的には非西洋だが、19世紀に「西洋」と向かい合い、20世紀には「近代日本」の空間に覆われた時間を共有した。「西洋」及び「近代日本」という翻案された「西洋」との圧力的接触、咀嚼、自己化という過程を経てどのように自己の「近代」を実体化したのか、また20世紀後半以降、娯楽市場で現出したグローバル化現象によって、読み直される「近代」の表象について、東アジア間に存在する「大衆」「大衆演劇」「大衆娯楽」概念の相違と共有を探りつつ、社会変容を随時反映して時間的蓄積よりも更新を本質とする「大衆演劇」「大衆娯楽」から明らかにする。それにより、従来の「東アジア文化圏」研究が「西洋」出自の分析・理論を借用する傾向を有するために見えなかった当該文化圏の独自性に立脚した分析・理論を模索し、「東アジア文化圏」研究基盤の構築を目指す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　東アジア文化圏　〕〔　近代　〕〔　大衆娯楽　〕

研究【経過・成果】の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本共同プロジェクト研究申請時の研究計画では、最終年度に当たる 20 年度は前後半に分け、前半は単年度テーマに取り組み、後半は初年度。第二年度の各単年度成果と統合して、総体成果としてまとめ、研究目的を達成する構想だった。

「東アジア文化圏」という空間範囲を設定しているため、初年度から研究協力者として台湾・中国・韓国の研究者を迎えて各国・地域の芸態も対象とし、比較検討する共通の軸として，社会との接点である「興行」を設定、その結果、国・地域により「興行」概念に相違があることが浮かび上がった。第二年度は共通軸である「興行」概念の共有化を図り、比較検討の材料として同じプラットフォームに並べられるレベルになった。中間成果報告として開催した国際シンポジウムの基調講演を本共同プロジェクト研究メンバー以外で、台湾の近現代映画・演劇研究者である石婉舜氏（台湾・清華大学）に依頼、「大衆性」という語を巡って、台湾の大衆的な現代劇・映画に大きな功績を残した林摶秋の仕事に焦点を当てた講演をして頂いた。林摶秋自身が日本統治時代に成長し、日本に留学して日本の映画・演劇界を経験し、台湾でその経験をどのように活かしたか、その奥に林摶秋自身は日本語で脚本を書き、それを中国語口語にし、更に台湾語にする作業が行われていたという指摘に啓発された。言語はその言語圏の文化・民俗を背景にしているが、翻訳の際にその背景を完全には変換できない。すでに本共同プロジェクト研究でも「興行」概念の相違を認識していたが、国・地域を超えてある芸態・脚本・演出などが拡大する場合、従来は主として受け手（観客）を基準に変容をみていたが、芸態・脚本・演出などを移す担い手の用いる言語の問題、翻訳による変換で何が変わるのかという視点も重要であることが認識された。日本のものについては当初から、東京の状況を日本の状況と敷衍する従来の形に対する疑問から、研究分担者の内、以前は日本の娯楽市場の中心であった関西圏に 1 名、特徴的な娯楽市場を形成した九州（特に福岡）に 1 名を当て、各地に特化した研究を進めてきたが、最終年度の 20 年度は強化したい新興劇・新演劇分野（特に発祥地である関西圏の状況）の研究者を分担研究者として、新たに 1 名迎えた。

しかしコロナ禍により予定していた研究活動（5 月から国内メンバーの研究会活動開始、9 月国際論壇―立教大学、12 月国際シンポジウム―台湾・台北芸術大学）が予定通りに実施できず、また、現場の状況、興行戦略などの資料収集のため松竹株式会社の方に知識・資料の提供を受ける計画も松竹の歌舞伎興行の緊急対応により実現しなかった。やむなく各自の分担テーマ研究を個々に進めることにしたが、資料収集に動けない状況下であり、更には研究組織のメンバー全員が大学で教鞭をとるため、オンライン授業など教育面の準備に例年よりも多大な時間を要したこと、また、オンラインによる研究集会を模索したが、台湾は教育機関の Zoom 利用禁止、中国は接続自体に障壁があるなど、研究協力者も含め、日本・中国・台湾・韓国のメンバーが安定した形でオンライン上で会する方法の模索に時間を要し、上半期は今年度の本共同プロジェクト研究が停滞するのではという危機

研究【経過・成果】の概要（つづき）

感を強く抱いた。この本共同プロジェクト研究が最終成果をまとめられないまま終了することになるのではという危惧は、幸い、10 月 30 日に研究期間の 1 年間延長をお認め頂けたこと、また、オンラインで研究集会を開催する環境を整えることができたことで、ある程度払拭できた。

2020 年 12 月 12 日･13 日に立教大学をベースに、台湾･台北芸術大学、韓国･中国の研究協力者、一部の日本の研究分担者は各々の自宅から参加する形で、国際論壇を開催した(博士課程在学生にも発表の場を設けた)。オンライン開催のため、妨害行為の可能性も考慮して一般には非公開とし、アジア地域研究所、メディアセンターのご協力を得て、後日発表部分の録画を大学の公式 Youtube で公開した(21 年 2 月 4 日～3 月 31 日)。実は質疑応答部分で活発に意見が交わされ、本共同プロジェクト研究にとって新たな気づきとなることも出たのだが、興行に付随するいわゆる暴力組織の働きに言及した発表もあり、それが他の研究分担者の今後の研究の展開に影響が出る可能性もあったため、一般公開は控える判断をした。また、19 年度計画であげていた 19 年度国際シンポジウム論文集(機関リポジトリで公開)の修正を反映した論文集を 10 月 8 日に刊行、現時点ではリポジトリで公開した論文の修正を、リポジトリにどう反映させるか、図書館の担当者と相談している状況である。

また、研究成果の還元の1つとして、立教大学全カリ科目で春学期「大衆演劇の世界」、秋学期「演芸の世界」を開講予定だったが、「大衆演劇の世界」は映像使用の問題で閉講したものの、「演芸の世界」はミックス型(緊急事態宣言発出のため一部はオンラインに切替)で開講し、研究成果を反映した授業を行うことができた。

申請時に想定していた最終年度の前半期に取り組む予定であった単年度テーマは、「『東アジア文化圏』の枠組としての『非西洋』の機能」とし、1980 年代以降、出来うる限り現時点までを時間的対象範囲に設定し、具体的には①「大衆」の属性の変容と「大衆演劇」・「大衆娯楽」・娯楽市場の変化の関係、②グローバル化と娯楽市場の変化の関係、③ローカル化と娯楽市場の変化の関係を挙げていたが、初年度・第二年度の進展を経てこの項目はすでに含みこむ形で成果が上がってきていたため、当初、20 年度の単年度テーマは娯楽市場における商品としての側面と各国・地域の演劇・芸態史における位置づけの両面から分担テーマに取り組むことにしていた。後者は大衆性の高い芸態が本質的に持つ消耗品としての属性を超え、自らの芸態のスタイルとして、あるいは他芸態に吸収される要素を確認し、演劇・芸態史に定位することを目指すものである。結果的に前述したような研究環境に陥ったため、国際論壇での中間成果発表では、一部に単年度テーマの成果が見られるに留まった。1 年間の研究期間延長をお認め頂けたので、21 年度の前半期の単年度テーマはこれを継続する。また、21 年度も各国・地域内の資料収集のための移動はある程度可能と思われるが、自分の居住地以外の国・地域での資料収集、研究集会の開催は、しばらくは難しい状態が続くと予想される。そのため、21 年度の国際論壇は今年度同様、立教大学をベースにオンラインで開催し、台湾・台北芸術大学で開催する最終成果報告の場となる国際シンポジウムは可能な限り遅く設定して（現時点では 21 年 12 月）、移動環境が整うのを待つことにした。

※この（様式２）に記入の【経過・成果】の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書（Ａ４縦型横書き１枚・自由様式）を添付すること。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①**中野正昭**「政治メディアとしての演劇――川上音二郎、大衆演劇、裸ショウ」神山彰編『演劇とメディアの 20 世紀』森話社，pp.299-338，2020 年 7 月
①**後藤隆基**「明治中後期における新聞と同時代演劇――新聞小説・興行・記録装置」神山彰編『演劇とメディアの 20 世紀』森話社，pp.49-67，2020 年 7 月
①**後藤隆基**「住友家と歌舞伎――明治中後期における片岡仁左衛門家との交流」『泉屋博古館紀要』36，泉屋博古館，pp.25-40，2020 年 12 月
①**森平崇文**「滑稽戯、戯単、漫画－滑稽戯『活菩薩』及び大公滑稽劇団を例に―」『中国戯単の世界――「戯単、劇場と 20 世紀前半の東アジア演劇」学術シンポジウム論文集』花書院，pp.199-216，2021 年 3 月
③**国際論壇**「娯楽市場と芸能　娯乐市场与表演」(オンライン開催)，立教大学，2020 年 12 月 12 日･13 日，主催：アジア地域研究所・立教 SFR プロジェクト共同研究「『東アジア文圏』研究基盤の構築―娯楽市場における『大衆』『演劇』『大衆演劇』から―」，共催：台湾・東亜大衆戯劇研究会（東アジア大衆演劇研究会）
以下、当該国際論壇での発表：
④**細井尚子**「見せるか、なるか－日本の娯楽市場の大衆性」2020 年 12 月 13 日
④**森平崇文**「中華民国期京劇一座の日本公演-緑牡丹を例に-」2020 年 12 月 13 日
④**中野正昭**「侠客と興行――籠寅興行部の創業と展開」2020 年 12 月 12 日
④**宮　信明**「再考吉本興業史・序説」2020 年 12 月 12 日
④**輪島裕介**「宝塚・松竹・「道頓堀ジャズ」：近代大阪の歌と踊り」2020 年 12 月 12 日
④**後藤隆基**「明治期京阪における新派の生成・受容・展開」2020 年 12 月 13 日
徐亜湘（研究協力者）「新劇中興之後：上海笑舞台的文明戯演出及其意義分析」2020 年 12 月 13 日
④**簡秀珍**（研究協力者）「1910 年代~1930 年代東亞演藝的跨域流動：以天勝一座帶回日本本土的表演者為討論中心」2020 年 12 月 12 日
④**張啟豐**（研究協力者）「戯曲編劇的民俗運用：以歌仔戯《佘太君掛帥》為例」2020 年 12 月 13 日
④**羅仕龍**（研究協力者）「科技來自於人性？--機器人與 1930-1940 年代的上海大眾戯劇」2020 年 12 月 13 日
④**洪荣林**（研究協力者）「韩国大学路 openrun 演出的形成与生存模式」2020 年 12 月 12 日
④**海　震**（研究協力者）「京剧书谱、娱乐市场与“伶界大王”的经典化：以《说谭》和《谭鑫培全集》为中心的探讨」2020 年 12 月 13 日
④**林于竝**（研究協力者）「戦時下の文化統制と移動演劇の運営」2020 年 12 月 12 日
＜博士課程在学生＞
劉建幗（台湾・國立臺灣藝術大學表演藝術研究所博士課程）「編導奇巧劇團《鞍馬天狗》之大眾元素運用」上記国際論壇「娯楽市場と芸能　娯乐市场与表演」2020 年 12 月 12 日
王楽水（本学文学研究科超域文化学専攻博士課程）「戦後宝塚歌劇の変容－植田紳爾研究を中心に」上記国際論壇「娯楽市場と芸能　娯乐市场与表演」2020 年 12 月 12 日
④国際論壇「娯楽市場と芸能　娯乐市场与表演」発表部分録画の公開(2021 年 2 月 4 日～3 月 31 日)，立教大学イベント映像アーカイブチャンネル URL:
https://www.youtube.com/channel/UC7VtDxBuivrnnavSFCmQDOQ
④**細井尚子**編著『東アジア文化圏の芸態にみる「大衆」～観念・実体・空間～論文集』，アジア地域研究所，2020年10月8日
④**森平崇文**「上海ラジオスターたちの 1949 年―湯筆花、筱快楽、范雪君」，TCS 国際シンポジウム「メディア化された身体/引き裂かれた表象――東アジア冷戦文化の政治性」，名古屋大学大学院人文学研究科付属超域社会文化センター，2021 年 1 月 23 日